

“クリニカル・パール”から始まる物語の扉を開こう!

玉井道裕

諏訪中央病院総合診療科

まさか、研修医時代から読み、勉強してきた雑誌『総合診療』の編集をさせてもらえるとは夢にも思わなかった。どんな特集を組もうかと考えた時、私にしかできない編集をしようと決意した。クリニカル・パール特集なら、それが可能かもしれない。どなたに原稿を依頼するかは悩んだが、自分の医師人生に大きな影響を与えてくれた先生を候補に挙げさせてもらった。執筆者の候補リストを作成すると、たくさんの医師の名前が浮かんできた。どの方をお願いするか迷った。そして、そのリストを見て、自分がこれほど多くの方々に支えられてきたことを、しみじみと実感した。読者の皆さんも、自分を育ててくれた“先生特集”を作るとしたら、誰に執筆を依頼するか考えてみてほしい。

私は恵まれた医師人生を歩んできた。多くの素晴らしい出会いと心に残る言葉をいただき、今の自分の医師像が形成されてきた。エビデンスはインターネットで調べれば出てくるが、自分が見聞きした言葉は検索したとしても出てこない。それは自分の中にしか残っていない。そして、それは一人ひとり違うはずである。各々の人生が異なるように、医師としての人生もまた異なる。あなたが医師として過ごした日々で、記憶に残っているのはどんな時だろうか。そこにはどんな言葉があったのであろうか。

言葉には不思議な力がある。人を励ましたり、



傷つけたり、良い意味でも悪い意味でも心に刺さったりする。クリニカル・パールというと、知識の伝達に主眼が置かれることが多いが、今回はあえて態度や姿勢にフォーカスを当てたパールも多く含めた。パールは単なる文字や言葉の意味ではなく、物語として記憶に残るもの

だ。ただの情報ではなく、そこには驚きや怒り、恥ずかしさ、不甲斐なさといった感情を伴うことが多い。ヘレン・ケラーが初めて「water」を経験した時のように、言葉の本当の意味を理解する時には感情の動きが伴う。パールを通じて執筆者の物語も味わっていただければ幸いである。

医師としての成長の道のりは長く険しい。途中で挫折したくなる時や仕事を辞めたくなる時もあるであろう。それでも臨床の世界が興味深いと感じられるのは、患者さんや病気と対峙する時だけではなく、上司や仲間の存在も大きいのではないだろうか。出会った患者さん、診断した疾患、育ててくれた上司、支えてくれる仲間……一人ひとりの医師人生は異なる。自分の医師人生を歩んでいるのは、自分しかいない。望んで進んできた部分もあれば、望まずに流れ着いた部分もある。それでも私は、多くの人に心から感謝できる医師人生を歩んできた。本誌の編集をしながら、ふとそんなことに思いを巡らせた。このような貴重な機会を与えてくださった関係者の方々には深く感謝したい。

⑥